

未成年の子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩

近 藤 真紀子 (香川県立保健医療大学)

佐 藤 禮 子 (兵庫医療大学)

本研究の目的は、未成年の子供を持ち、妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩を明らかにし、看護のあり方を検討することである。20歳以下の子供とがんに罹患した妻をもつ30~40歳代の夫で、研究参加に同意の得られた5名を対象に、妻の死亡前3ヶ月から死別後2ヶ月にかけて、参加観察法と半構造化面接法によりデータ収集を行い、質的帰納的分析を行った。

分析の結果、最終的に含まれる性質により7つに集約される苦悩が得られた。1. 死に逝く妻がかげがえのない愛おしい存在であるが故の苦悩、2. 夫婦で築き上げてきた幸せの象徴としての家庭を失う苦悩、3. 妻に迫る死の脅威に晒される苦悩、4. 子供のいる家庭生活を一人で維持する困難さの苦悩、5. 母親を失う子供の父親になる困難さの苦悩、6. 孤立無援だと感じる苦悩、7. 亡き妻を支えとすしかない苦悩。

壮年期の夫の苦悩の特徴は、愛着の対象としての妻及び築き上げてきた家庭の2つの喪失に直面、妻と築いてきた家庭を守る闘いの苦難、妻の死に伴う父親役割の重圧によってもたらされることにある。子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫への看護のあり方は、1) 妻を失いつつある夫の生活環境に注目しアセスメントする、2) 妻への看病の質を重視した関わり、3) 妻の死後の父子家庭への構えを作る、4) 親子関係の発展に妻を組み込むことが重要である。

KEY WORDS :middle-aged husbands, bereavement, minor children, sufferings

I. はじめに

壮年期にある男性は、親役割の取得や夫婦間での役割分担などの子供の健やかな成長発達を促すための役割¹⁾が期待され、自分にとって最も大事な仕事や家族などに全力を注ぐ一家を構える時期²⁾にある。また、男性は、愛着と関係性が重視される女性よりも自律と達成が重視され³⁾、職業人として成功し社会から認められることがアイデンティティの源となる⁴⁾と言われる。一方、30~50代男性の自殺率の上昇が際立つ⁵⁾。

妻と死別した壮年期の夫は、死別1年以内の死亡数が、非死別者の4.5倍と高い⁶⁾。また、残された配偶者の死亡率や罹患率は、女性よりも男性、老年期よりも壮年期の方が高い⁷⁾。相川⁸⁾は、妻との死別体験を元に、壮年期の夫の死亡率の高さには、家事育児などの生活変化の衝撃が影響すると指摘している。これらは、壮年期の夫が、妻との死別により、大きな生活上の変化を体験していることを示している。

妻と死別した子供をもつ壮年期の夫を対象とした研究には、夫が、妻の存在感の大きさについて語り⁹⁾、妻の思いを理解できていなかったことに後悔を感じていた¹⁰⁾ことを示す事例研究がある。また、子供を持つ壮

年期の夫と、終末期にある妻、妻の実母の3者の関係に着目した家族アセスメントのあり方が、事例検討されている¹¹⁾。配偶者と死別する夫や妻は、がん告知時から苦しみ満ちた情緒的体験をし¹²⁾、また、伴侶の死に立ち向かうことで予期的悲嘆を行う¹³⁾と言われている。夫と死別する子供を持つ壮年期の妻は、思春期の子供を父親の最期に寄り添わせることで苦悩し¹⁴⁾、死別後は子育てへの不安を感じた¹⁵⁾と事例報告されている。これらは、未成年の子供をもち壮年期に配偶者と死別する夫や妻の貴重な経験を示す事例研究である。しかし、未成年の子供をもち妻と死別する壮年期の夫の苦悩については、明らかにされていない。

苦悩については、神間ら¹⁶⁾が、がん患者の苦悩が、人間の根源的な深い苦しみであることを明らかにしている。また、苦悩の定義を検討した金子ら¹⁷⁾は、人としての統合性が脅かされる時に生じる不快な感情であることを示している。これらは、苦悩が人間存在に関わる深い悩みを意味することを示していると言える。

II. 研究目的

未成年の子供を持ち、妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩を明らかにし、妻を失う壮年期男性に対する看護のあり方を検討する。

Ⅲ. 研究方法

1. 用語の定義

本研究では、苦悩を「自己や周囲の状況を通して、自己の内面世界で経験する苦痛や悩み」と定義する。

2. 研究対象

20歳以下の子供をもち、妻が癌に罹患し予後3ヶ月程度と診断された、30～40歳代の男性で、研究参加に同意の得られた者。

3. 調査内容

調査内容は、①妻の癌の罹患後から現在までの心情、および現在の心情、②生活状況と健康状態、③妻への思い、④子供への思い、⑤両親（父母・義父母）への思い、⑥仕事や社会生活への思い、⑦自分の将来・人生への思い、⑧サポート状況についてとする。

4. 調査方法

参加観察法、面接法、及び、患者（妻）の病状に関する記録調査を行う。患者（妻）の入院中は、患者（妻）の受持ち看護師として身の回りの世話をを行いながら、調査内容に関連する場면을参加観察し、フィールドノートに記載し資料とする。患者（妻）との信頼関係が築けた後、患者（妻）の了承を得て、対象者に対して面接調査を行う。面接では、調査内容に関する関心事や心情を自由に語れるようなオープンエンドの質問をし、思いや考えを明確にするような質問を加えることで、ありのままの経験内容を得られるようにする。面接期間は、患者（妻）の死亡前3ヶ月から死別後2ヶ月程度とし、対象者の同意を得て可能な限り定期的に面接する。患者（妻）の死亡後は、電話または直接対面により資料を得る。面接内容は許可を得て録音し、逐語録を作成する。

5. 倫理的配慮

患者（妻）及び対象者の両方に対して、研究参加は自由であり途中辞退も可能であること、参加を希望しない場合や途中辞退した場合も不利益を被ることはないこと、知り得た情報は研究以外に使用せず秘密は厳守されることを説明し同意を得る。また、面接は、対象者の状況を十分に考慮し、面接時にその都度気持ちを確かめ、了承を得て行い、話したくないことは話さなくてよいことを約束する。また、対象者が一人の時にプライバシーの保護できる個室で行う。

6. 分析方法

苦悩は、対象者の内面世界での主観的な経験であることから、語られた体験の意味を対象者の視点から捉える現象学的アプローチ¹⁸⁾を参考に、以下の方法で分析を行う。分析手順は2段階とし、対象者毎の個別分析と、全体分析を行う。個別分析は、①記述データを熟読し、

対象者が内面世界で経験している苦痛や苦悩を語っている記述部分を抜き出し、文脈を重視しながら対象者の表現に忠実に簡潔な一文にまとめ、ラベルとする。②抽出された全ラベルについて、意味内容の類似するものを集めて簡潔な表題をつけ、〈表出された対象者の苦悩〉とする。全体分析は、①個別分析によって得られた全対象者の〈表出された対象者の苦悩〉の表題を意味内容の類似するもの毎にまとめ、そのまとまりに含まれる中心的な意味を表す言葉を表題として付け、《意味内容別の苦悩》とする。②《意味内容別の苦悩》に含まれる性質を、元の記述に戻って確認し、意味内容の類似するものを集めて簡潔な言葉で表現し、苦悩の本質とする。以上の分析過程において、共同研究者間で分析結果の一致を見るよう検討を重ね、妥当性と信用性の確保に努める。

Ⅳ. 結果

1. 対象者の概要

対象者は5名であり平均年齢41.6歳、妻の平均年齢は39.6歳、卵巣癌3名、子宮癌1名、胃癌1名であり、結婚年数は3～19年（平均12.8±5.4年）、子供は乳幼児2名、小学生3名、中学生2名、高校生1名であった。対象者の概要は表1に示す。

表1 対象者の概要

ケース	年齢	職業	子供の年齢（性別）	家族形態
A	30代後半	自営業	2(男)	核家族
B	40代前半	会社員	1(女)	両親と同居
C	40代前半	会社員	9(女) 7(男)	核家族
D	40代前半	会社員	17(女) 15(男)	核家族
E	40代後半	会社員	14(男) 11(男)	義母と同居

2. 未成年の子供をもち妻をがんで失う壮年期男性の苦悩

個別分析の結果245のラベルが得られ、全体分析の結果、最終的に含まれる性質により集約される苦悩として、7つが得られた。詳細は表2に示す。以下、〈 〉は表出された対象者の苦悩、《 》は意味内容別の苦悩を示す。

1) 死に逝く妻がかけがえのない愛おしい存在であるが故の苦悩

この本質には、〈医師にできないのなら、自分が力なくでも楽にしてやろうかと思う〉などの《苦痛にあえぐ妻の姿を見ると、居たたまれなくなる》と、〈誰よりも妻の良き理解者でいたいし、妻の側に居て、少しでも妻の苦悩を和らげたい〉や〈妻が喜び力が湧くように、子供のことを思い出させる〉の《少しでも側に居て妻の力

表2 未成年の子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩の分析結果

表出された対象者の苦悩	意味内容別の苦悩	苦悩の本質
<ul style="list-style-type: none"> ・医師にできないのなら、自分が力づくでも楽にしてやろうかと思う ・家族というのはあまりにも無力だ ・分骨や自ら死を望む妻の訴えに居たたまれなくなった ・(死後) 死んで尚、苦痛から解放されない妻が哀れで可愛そうだ 	1) 苦痛にあえぐ妻の姿を見ると、居たたまれなくなる	1. 死に近く妻がかけがえのない愛おしい存在であるが故の苦悩
<ul style="list-style-type: none"> ・誰よりも妻の良き理解者でいたいし、妻の側に居て、少しでも妻の苦悩を和らげたい ・妻が喜び力が湧くように、子供のことを思い出させる ・自分の思いよりも妻の望みを優先しよう ・例えば安楽死であっても、妻の意志を尊重したい ・(死後) 望みを叶えられなかった妻の思いを汲んで、死後、その望みをかなえよう 	2) 少しでも側に居て妻の力になりたい	
<ul style="list-style-type: none"> ・性的な満足感や安らぎが得られないのは、男として辛い ・何もできなくていいから、側に居て欲しい ・妻以外の女性では、安らぎや温かさは得られない ・妻を亡くしては生きていけない ・(死後) 妻の亡骸にきれいであってほしい、妻の亡骸を永遠に残したい 	3) 妻以外から安らぎや温かさは得られず、かけがえのない妻と離れたくない	
<ul style="list-style-type: none"> ・平凡な結婚・家庭生活を送ってきた自分たちがなぜ平均の外に追いやられるのか納得できない ・想像もしなかった不幸が我が家の現実になり、幸せと不幸の落差が大き過ぎて発狂しそうだ ・自分が死んで、妻や子供が路頭に迷うよりは、まだましか ・(死後) 自分と子供だけが取り残されてしまった 	4) 妻と一緒に作り上げてきた幸せな家庭を壊され、不幸が現実になるのは、納得がいかない	2. 夫婦で築き上げてきた幸せの象徴としての家庭を失う苦悩
<ul style="list-style-type: none"> ・夫婦の楽しかった頃は二度と戻らないし、自分達夫婦の歴史も終わりがきた ・夫婦には一方が病気になることと分からないことがある ・自分達夫婦には何の展望も希望もない 	5) 最期まで夫婦として生きたい	
<ul style="list-style-type: none"> ・妻が悪くなっているのが分かるので、あと何日生きられるかと思うとノイローゼになりそう ・妻がどうなって死んでいくのか知りたいが、怖くて聞けない ・自分のこれまでの選択は正しかったのかと考える ・妻は強いので、まだ大丈夫だと自分に言い聞かせる ・もう限界だ、でも妻に生きていて欲しい、何とか生かす手だてはないか ・自分に妻の葬式なんかできない 	6) 刻々と迫り来る妻の死を認めざるを得ないが認めたくない	3. 妻に迫る死の脅威に晒される苦悩
<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちを奮い立たせて冷静に看取ろう 	7) 妻の死を冷静に看取ろう	
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の身を削ってでも、大事な家族を守り抜こう ・何とか仕事と育児・家事を両立できないかと四苦八苦する ・子供のいる家庭の家事は手を抜くと身動きが取れなくなり、どう頑張ってもどうにもならない ・妻がいた時のような家事の行き届いた生活は諦めた ・(死後) 生活に追われてしんどい 	8) 育児・家事と仕事の両立は、どんなに頑張っても、限界がある	4. 子供のいる家庭生活を一人で維持する困難さの苦悩
<ul style="list-style-type: none"> ・妻の看病にシワ寄せがいくが、自分達父子の生活を優先するしかない ・妻が生きている長期戦から妻の死が避けられない短期戦になったので、妻を優先しようか 	9) 生活を守るためには、妻の看病よりも自分達父子の生活を優先するしかない	
<ul style="list-style-type: none"> ・子供の冷静さ・平然とした姿に救われている ・子供よりも妻の方が心配だ ・子供の気持ちになんか関心が無いし、そんなことを考える余裕もない ・子供も特に希望があるとも思えない 	10) 子供のことまで考える余裕は全くない	5. 母親を失う子供の父親になる困難さの苦悩
<ul style="list-style-type: none"> ・子供の問題行動や嘆く姿を見て、初めて子供も辛かったと分かった ・(死後) 子供は小さいなりに母親の死が分かって、自分を納得させようとしているようだ ・(死後) 幼くして母親と別れる子供が可哀想だし不憫だ ・(死後) かけがえのない母親の死は子供にとって大きなハンディーだ 	11) 子供の苦悩する様子を目の当たりにして、子供が不憫になった	
<ul style="list-style-type: none"> ・子供に母親の死を伝えたら手に負えなくなるのではないかと思うと決められない 	12) 母親の死と直面する子供への接し方が分からない	
<ul style="list-style-type: none"> ・(死後) 妻のような明るさ・温かさは出せないで、父親に母親の穴埋めはできない ・(死後) 幼な子を一人で育てられるのか、思春期の問題に一人で対応できるのか、自信がない ・(死後) 子供のために、自分がいつまで生きていてやれるのか自信がない ・(死後) 自分に母親の代りはできないので、子供の運命と諦めて子供の力を信じるしかない 	13) 一人で子供を育てていく自信がない	
<ul style="list-style-type: none"> ・苦悩する子供の話に初めて耳を傾けると、子供との関係が良くなった 	14) 子供の苦悩を受け止めよう	
<ul style="list-style-type: none"> ・本当は支援が欲しいけれど、老親には頼れない／親には最初から頼る気はない ・職場に迷惑はかけたくない、いつまでも人の厚意に甘えることはできない ・本心を話せる友達はいない ・自分の本当の弱さをさらけ出せるのは妻しかいない ・泣けるのは一人の時だけだ 	15) 唯一弱さをさらけ出せる妻にも頼れず、頼れる人は誰もいない	6. 孤立無援だと感じる苦悩
<ul style="list-style-type: none"> ・子供が外で病気のことをばらすので困る ・人並みでありたいから世間体が気になる ・(死後) 世間から憐れみの目で見られたくないでわざと明るそうに振舞う 	16) 世間から憐れみは受けたくない	
<ul style="list-style-type: none"> ・(死後) 妻の死は認めるしかないが突きつけられるのは耐え難い ・(死後) 嵐の前の妻と暮らした穏やかな元の生活に戻りたい ・(死後) 少なくとも妻は僕たち父子の不幸な姿は望んでいない 	17) 妻の死は耐え難く、生前の妻の姿や思いが唯一のよりどころ	7. 亡き妻を支えとすしかない苦悩

になりたい」と、〈何もできなくていいから、側に居て欲しい〉や〈妻以外の女性では、安らぎや温かさは得られない〉などの《妻以外から安らぎや温かさは得られず、かけがえのない妻と離れたくない》の3つが含まれた。ある対象者の語り：「妻に殺してくれ！って言われた、もうどうしたらいいのか分からない(取り乱した様子)」、「僕がまず妻に甘えるのをやめないと、妻は看取れない」

2) 夫婦で築き上げてきた幸せの象徴としての家庭を失う苦悩

この本質には、〈平凡な結婚・家庭生活を送ってきた自分たちがなぜ平均の外に追いやられるのか納得できない〉や〈想像もしなかった不幸が我が家の現実になり、幸せと不幸の落差が大き過ぎて発狂しそうだ〉などの《妻と一緒に作り上げてきた幸せな家庭を壊され、不幸が現実になるのは、納得がいかない》と、〈夫婦の楽しかった頃は二度と戻らないし、自分達夫婦の歴史も終わりがきた〉などの《最期まで夫婦として生きたい》の2つが含まれた。ある対象者の語り：「自分達は親に反対されて結婚したから、鍋の一つから自分達で揃え、やっと家を買ったのに。その直後に妻がこんなことになってしまっ…折角夫婦でがんばってきたのに、すっごく悔しい。」

3) 妻に迫る死の脅威に晒される苦悩

この本質には、〈妻が悪くなっているのが分かるので、あと何日生きられるかと思うとノイローゼになりそうだ〉や〈もう限界だ、でも妻に生きていて欲しい、何とか生かす手だてはないか〉などの《刻々と迫り来る妻の死を認めざるを得ないが認めたくない》と、〈気持ちを奮い立たせて冷静に看取ろう〉の《妻の死を冷静に看取ろう》の2つが含まれた。ある対象者の語り：「父親の時は亡くなる前から焼香の順番まで決められたけど、妻のは違う、死ぬ前から葬式のことなんか考えられない。代わりに誰か、喪主をして欲しい」

4) 子供のいる家庭生活を一人で維持する困難さの苦悩

この本質には、〈子供のいる家庭の家事は手を抜くと身動きのとれなくなり、どう頑張ってもどうにもならない〉や〈妻がいた時のような家事の行き届いた生活は諦めた〉などの《育児・家事と仕事の両立は、どんなに頑張っても、限界がある》と、〈妻の看病にシワ寄せがいくが、自分達父子の生活を優先するしかない〉などの《生活を守るためには、妻の看病よりも自分達父子の生活を優先するしかない》の2つが含まれた。ある対象者の語り：「家電は買い揃えた。乾燥機も買ったけど、で

も、たたんで箆筒にしまうまではしてくれない。盛り上げた洗濯物の中から引っ張り出して子供が着る姿も見慣れたから、もういいか…って思う」

5) 母親を失う子供の父親になる困難さの苦悩

この本質には、〈子供よりも妻の方が心配だ〉などの《子供のことまで考える余裕は全くない》と、〈子供の問題行動や嘆く姿を見て、初めて子供も辛かったと分かった〉や〈幼くして母親と別れる子供が可哀想だし不憫だ〉の《子供の苦悩する様子を目の当たりにして、子供が不憫になった》と、〈子供に母親の死を伝えたら手に負えなくなるのではないかと思うと決められない〉の《母親の死と直面する子供への接し方が分からない》と、〈幼な子を一人で育てられるのか、思春期の問題に一人で対応できるのか、自信がない〉などの《一人で子供を育てていく自信がない》と、〈苦悩する子供の話に初めて耳を傾けると、子供との関係が良くなった〉の《子供の苦悩を受け止めよう》の4つが含まれた。ある対象者の語り：「子供には、(母親の命が)もう危ないから覚悟しとけよってだけ言った。その後、どう思っているかなんか、そんな、知らん」、「自分達夫婦は結婚が遅かったから他の人より10年遅れている。子供が20歳になった時自分は60近くになる。自分だっていつまで元気でいてやれるか分からない」

6) 孤立無援だと感じる苦悩

この本質には、〈自分の本当の弱さをさらけ出せるのは妻しかいない〉などの《唯一弱さをさらけ出せる妻にも頼れず、頼れる人は誰もいない》と、〈世間から憐れみの目で見られたくないのでもわざと明るそうに振舞う〉などの《世間から憐れみは受けたくない》の2つが含まれた。ある対象者の語り：「結局、車の中でCDをかけて、一人で泣くしかない」

7) 亡き妻を支えとするしかない苦悩

この本質には、〈少なくとも妻は僕たち父子の不幸な姿は望んでいない〉などの《妻の死は耐え難く、生前の妻の姿や思いが唯一のよりどころ》の1つが含まれた。ある対象者の語り：「少なくとも妻は、自分達の後追い自殺だけは望んでないと思う。久しぶりに公園に子供を連れて行ってやろうと思う。妻が病気になってから、一度も行ってなかったから…」

V. 考察

1. 未成年の子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩の特徴

未成年の子供をもち妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩の本質は7に集約された。ここでは、これら7の苦悩の

本質から見出される夫の苦悩の特徴について述べる。

1) 妻の死がもたらす2つの喪失に直面

夫は、1. 死に逝く妻がかけがえのない愛おしい存在であるが故の苦悩、6. 孤立無援だと感じる苦悩、2. 夫婦で築きあげてきた幸せの象徴としての家庭を失う苦悩、3. 妻に迫る死の脅威に晒される苦悩を経験していた。これらは、夫が、愛着の対象としての妻及び唯一自分の弱さをさらけ出せる妻を失うことと、築きあげてきた家庭の2つの喪失に直面していること、そして、その喪失をもたらす妻の死に脅威を感じていることを示している。つまり、夫は、自分が唯一本心をさらけ出せる存在であるが故に、妻への愛おしさと失い難さが増し、共に家庭を築いてきたパートナーを失うことで、孤立感を深めていると考える。夫は、愛おしく頼りになる妻と、共に築いてきた家庭の両方の喪失に直面していると言える。

妻と築き上げてきた家庭は、夫にとって幸せの象徴であった。これは、妻と結婚し子供をもうけ家庭を築くことが、夫にとって、自分の手で自分の人生を築き上げることを意味し、妻はその同志であったことを示す。築き上げてきた家庭の喪失は、夫が、人生半ばで、築き上げてきた自分の人生を台無しにされることを意味し、これは、壮年期の配偶者の死が、一緒に過ごすはずだった未来を失った怒りや悲しみをもたらす¹⁹⁾という指摘と一致する。また、壮年期男性は、社会から一人前の男として認められるために家庭を築くことに価値をおく²⁰⁾と言われる。本研究の対象者も、世間から、家庭を失う自分が憐れみの目で見られることを嫌った。家庭の喪失は、社会の中で生きる男としてのアイデンティティに影響を及ぼすものと言える。

愛着の対象としての妻の喪失は、妻への深い愛情と深い絆を断ち切られる別離の苦悩を示すものと言える。妻の死を看取る過程は、妻への深い愛情ゆえに妻の苦悩を自分のことのように感じ、また、妻のかけがえのなさ・愛おしさを確認するプロセスである。成人の愛着理論を示したHazan²¹⁾らによると、愛し合った異性間の関係は、乳幼児の母子間の愛着関係と共通すると言われる。夫にとって妻との別離は、耐え難い苦悩をもたらす生木を裂くような痛みと言える。

また、夫が苦悩を受け止めてもらえる対象を持ち得ない理由は、妻以外の相手に甘えや弱みを見せられないことにあった。壮年期男性は、対人関係が妻子と職場関係に限定され、主たるサポートが親から妻へと移行する²²⁾と言われる。これは、壮年期男性のサポート源が妻に集中する傾向を示す。壮年期の夫は、妻の死で、最大のサ

ポート源を失うと言える。

さらに、7. 亡き妻を支えとするしかない苦悩は、愛する妻と築き上げてきた家庭の2つの喪失が現実のものとなり、子供と共に取り残された夫にとって、唯一の生きる支えが妻であることを示していた。これは、愛着の対象としての生前の妻と生きる夫の姿、また、既に実体のない妻を生きる支えとする夫の姿を示していると言える。

子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩は、深い愛情と深い絆で結ばれ、唯一最大のサポート源である妻の喪失と、築き上げてきた人生と未来を奪い、社会で生きる男としてのアイデンティティに影響を及ぼす家庭の喪失の、2つの喪失に直面することによってもたらされ、妻との死別後も愛着の対象としての妻を唯一の支えとするところに、特徴がある。

2) 妻と築いてきた家庭を守る闘いの苦難

夫は、2. 夫婦で築き上げてきた幸せの象徴としての家庭を失う苦悩と、4. 子供のいる家庭生活を一人で維持する困難さの苦悩を経験していた。これは、夫が、幸せの象徴である家庭の喪失に直面しつつも、家庭を守り抜くために妻の果たしてきた役割を担い、必死に闘う姿を示していると言える。そして、6. 孤立無援だと感じる苦悩は、2. 夫婦で築き上げてきた幸せの象徴としての家庭を失う苦悩と4. 子供のいる家庭生活を一人で維持する困難さの苦悩の2つの苦悩を強めていた。これは、妻と築いてきた家庭を守る闘いが、孤独な闘いであることを示している。つまり、夫の苦悩は、妻と築いてきた家庭の喪失に直面する中で、何とか家庭を守り抜こうと、孤独で苦難に満ちた闘いをすることによって、もたらされると言える。

子供のいる家庭生活を維持する困難さは、子供の日常生活と密着する家事を毎日滞りなく行わなければならないことに、特徴があった。子供の年齢が低い程、親役割はより実質的なものが求められ、それを満たすことが子供の健やかな成長発達を促す²³⁾。夫にとって、家庭を守ることは、妻に代わって母親・主婦の役割を引き受け、子供の日常生活を維持することで、子供の成長を守ることであったと言える。

また、育児・家事と仕事の両立の困難さは、妻の看病よりも自分達父子の生活を優先せざるを得なくなるものであった。これは、夫が、妻か自分たち父子の生活かの選択を迫られたことを示す。壮年期男性の労働環境は悪化傾向にあり、特に30代男性の労働時間の延長が目立つ²⁴⁾。また、多賀²⁵⁾は、妻の発病で、仕事上の競争からの離脱を余儀なくされた男性の、男としてのアイデン

ティティへの悪影響と、家族の経済基盤を支える男性の競争から離脱できないジレンマの両方を指摘している。これは、厳しい社会的環境の中で、壮年期男性が仕事を手放すことの困難さを示している。夫は、妻に代わって子供の日常生活を守るための母親・主婦の役割を引き受けるが、家族の経済基盤を支える父親・夫の役割は放棄できず、さらに、妻の看病という役割を担うことは、苦悩に満ちたものであったと言える。また、妻を愛し離れ難さを感じている夫にとって、妻の看病を諦めることは、大きな痛みを伴う選択であったと考える。

子供をもち妻を失う夫の苦悩は、厳しい社会的環境の中で、夫・父親としての役割と、妻の担ってきた役割と、妻の看病という、全ての役割を一人で引き受けて、妻と築いてきた家庭を守るために闘う、その闘いの苦悩がもたらすところに、特徴がある。

3) 妻の死に伴う父親役割の重圧

1. 死に逝く妻がかけがえのない愛おしい存在であるが故の苦悩、2. 夫婦で築きあげてきた幸せの象徴としての家庭を失う苦悩、3. 妻に迫る死の脅威に晒される苦悩、4. 子どものいる家庭生活を一人で維持する困難さの苦悩、6. 孤立無援だと感じる苦悩の5つの苦悩は、妻の闘病中から死別後にかけて、一貫して認められた。しかし、5. 母親を失う子供の父親になる困難さの苦悩は、妻の臨終前から死別後にかけて、特徴的に認められた。これは、妻の死がもたらす2つの喪失に直面し妻と築いてきた家庭を守る闘いの苦悩を経験している夫が、妻の死に直面して初めて、母親を失う子供の父親になるという現実に向き合うことを示している。つまり、夫は、妻の死に伴う新しい父親役割を、受け入れ準備の整わない中で引き受けると言える。

妻の死に伴う新しい父親役割には、母親と死別する子供への対応と、子供を一人で育て上げることの2つが含まれると考えられた。母親と死別する子供は、不安や鬱が強く自尊感情も低く²⁶⁾、十分に死を理解できない場合でもその子独自の表現で悲しみを表す²⁷⁾と言われる。これは、子供もまた、母親との死別に苦悩する存在であることを示し、特別な配慮を必要とすることを示唆する。しかし、自分自身が妻を失う苦悩の中にある父親にとって、子供の苦悩を慮り適切に対応することは困難を伴うと言える。2つめの、子供を一人で育て上げるという父親役割は、思春期への対応など発達段階上の問題、母親の代わりはできないという父親としての限界、自分の死で親が誰もいなくなることが、困難感を強めていた。これらは、自分が全責任を負うただ一人の親であることの重圧を示している。これら2つの父親役割は、妻の死に

よって生じた役割であり、これまで果たしてきた父親役割とは異なる未知の経験となる。また、壮年期での妻との死別は頻度が低いため、役割モデルも存在しないことが多い。役割モデルがなく、未知なる経験となる妻の死に伴う父親役割は、夫にとって、負担の大きいものと言える。

子どもを持ち妻を失う夫の苦悩は、妻の死がもたらす喪失と闘いの苦難のために受け入れ態勢の整わない状態の中で、母親を失い苦悩する子供への対応と子供を一人で育て上げることの、2つの新しい父親役割を受け入れる重圧によってもたらされるところに特徴がある。

2. 未成年の子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫への看護のあり方

未成年の子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫への看護のあり方は、妻の死がもたらす2つの喪失、妻と築いてきた家庭を守る闘いの苦難、妻の死に伴う父親役割の重圧が少しでも緩和されるよう、以下が重要である。

1) 妻を失いつつある夫の生活環境に注目しアセスメントする

妻と築いてきた幼い子どものいる家庭を一人で維持することの困難さが夫に苦悩をもたらしていることから、夫の会社での位置・役割、子供との関わり、健康状態、サポートシステムの状況などについてアセスメントし、夫の経験している苦悩の内容や程度の把握に努める。その上で、より個別的な対応を行う。

2) 妻への看病の質を重視した関わり

仕事と家庭生活の維持で余裕のない夫が、最小限の負担で、後悔の残らない看病をするために、患者への日常生活上の援助は看護師が十分に行い、夫は妻の精神的な支援に専念できるようにする。また、妻との関わりを通して予期的悲嘆が進み、無力感が緩和されるように、夫にできる妻への簡単なケアについて助言する。病室を家族団らんの場としたり、夫の都合に応じて面会できるよう、場と時間の調整を行う。

3) 妻の死後の父子家庭への構えを作る

築き上げてきた家庭の喪失で苦悩する夫の心情に共感し、また、子供のいる家庭を維持するための現在の苦労を十分にねぎらう。夫の少ない負担で、父子の日常生活が維持できるように、サポートシステムを検討する。子供を一人で育て上げる現実に直面する夫に対しては、重圧感を十分に表出できるように働きかけ、今後の方策について一緒に考える。また、育児支援や育児相談などの公的支援に関する情報提供を行う。時間的制約の多い夫が孤立しないための方策としては、インターネットの掲示板を利用した遺族交流の効果²⁸⁾が示すように、自由な

時間に利用できる方法を検討する。これらによって、妻亡き後も父子で家庭を築いていけるように、準備を進める。

4) 親子関係の発展に妻を組み込む

7. 亡き妻を支えとするしかない苦悩は、死別後の夫や子供が、残される父子の幸せを願う妻の思いを生きる支えとするしかないことを示す。夫や子供に自分の思いを十分に伝えられるよう、妻に対して、伝えることの大切さを説明し、伝え方や内容について悩む場合には相談にのる。妻の心理状態を十分にアセスメントし、可能であれば、夫婦間で子供の養育や将来などについて話し合えるように働きかける。また、互いの真意や思いが伝わるよう、夫婦間の橋渡し役となる。

母親と死別する子供への対応に苦慮する父親に対しては、子供の発達段階に応じた死の理解についての情報を提供し、母親と死別する子供の非言語的な反応について解説する。そして、父子で母親を看取り、悲しみの共有ができるようにする。

VI. 終わりに

未成年の子供を持ち妻をがんで失う壮年期の夫の苦悩は、妻の死がもたらす2つの喪失に直面、妻と築いてきた家庭を守る闘いの苦難、妻の死に伴う父親役割の重圧によってもたらされるところに特徴があった。今回は、子供には触れなかったが、子供は比較的早期から両親の異変に気付き、情緒反応や問題行動、健康障害などの非言語的な方法でその動揺を表現していることが、参加観察法により確認できた。残された親の苦悩が深く、子供に関心を向けられない場合、子供は2人の親の死を体験するに等しい²⁹⁾と言われる。母親と死別する子供の健全な成長発達の為にも、夫への支援は重要である。今後は、夫が子供とどのように生活を再建し、子供を育て上げていくのか、長期的展望にたった研究や、がん罹患直後から闘病期間中にかけての支援方法を確立していくことが大事だと考えている。

(本論文は、千葉大学大学院看護学研究科における修士論文の一部を加筆・修正したものである。)

謝 辞

研究にご協力いただきました皆様に、深謝いたします。

引用文献

1) 松田 惺：父親の発達心理学（柏木恵子編集），川島書店，267-307，1994。

- 2) 杉村和美：講座 生涯発達心理学5 老いることの意味 中年・老年期（無藤 隆，やまだようこ編），金子書房，123-138，2001。
- 3) 前掲書2) 岡本佑子著，pp41-66。
- 4) 斉藤浩子：流動する社会と家族1 社会と家族の心理学（東洋，柏木恵子編），ミネルヴァ書房，197-198，2002。
- 5) 厚生統計協会：厚生指標 国民衛生の動向，53(9)，49-50，2006。
- 6) 相川 充：愛する人の死，そして癒されるまで 妻に先立たれた心理学者の‘悲嘆’と‘癒し’，大和出版，97-101，2003。
- 7) 橋本 剛：男と女の対人心理学（和田実編），北大路書房，148-150，2005。
- 8) 前掲書6) pp101-104。
- 9) 芦川千恵子，飛田妙子：終末期の妻を抱える壮年期の夫への精神的援助のあり方，第33回日本看護学会論文集-成人看護Ⅱ-：123-125，2002。
- 10) 清水佐智子：一般病棟で妻を看取った壮年期の夫の困難と後悔-インタビューの結果から-，川崎市立看護短期大学紀要，8(1)：51-55，2003。
- 11) 渡邊裕子：援助を拓く家族アセスメント 30代の妻が終末期を迎え危機状態にある家族への援助，Community Care，4(5)：65-69，2002。
- 12) 伊藤美也子：がん患者の療養における配偶者の情緒体験と悲嘆作業，日本赤十字看護大学紀要，11：68-74，1997。
- 13) 畠山とも子：ホスピス入院中の患者の配偶者が行う予期的悲嘆の特徴，日本がん看護学会誌，16(1)：39-48，2002。
- 14) 武田睦美，赤木優子，須藤 幸，佐藤友子：壮年期がん終末期患者への妻への援助-父親の死を間近にした思春期の子供への関わり，ホスピスケアと在宅ケア，13(3)：269-272，2005。
- 15) 廣瀬規代美，中西陽子，樽矢裕子，青山みどり，二渡玉江：在宅で死を迎えたがん患者の遺族への看護援助-壮年期の夫を亡くした妻へのインタビューを通して考える-，第34回日本看護学会論文集-成人看護Ⅱ-：194-196，2003。
- 16) 神間洋子，佐藤禮子，桑原麻理子：脳機能障害をもつ悪性脳腫瘍患者の苦悩，第24回日本看護科学学会学術集会講演集：193，2004。
- 17) 金子眞理子，羽山由美子：がん対象者と苦悩-文献レビューと対象者面接からの一考，聖路加看護学会誌，2(1)：14-21，1998。
- 18) Colaizzi P.: Existential Phenomenological Alternatives for psychology, (Valle R.S., King M.ed.), Oxford University Press, 48-71, 1978.
- 19) J. クロガー著，榎本博明編訳：アイデンティティの発達-青年期から成人期，北大路書房，184，2005。
- 20) 多賀 太：男らしさの社会学 揺らぐ男のライフコース，世界思想社，190，2006。

- 21) 前掲書7) 金政祐司著, pp78-83.
 22) 前掲書7) pp143-148.
 23) 大西誠一郎: 親子関係の心理, 金子書房, 3-7, 1971.
 24) 熊沢 誠: リストラとワークシェアリング, 岩波書店, 125, 2003.
 25) 前掲書20) pp117.
 26) Segel K, Mesagno FP, Karus D, Christ G, Banks K, Moynihan R: Psychosocial adjustment of children with a terminally ill parent, *Journal of American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 31(2): 327-333, 1992.
 27) リンダ・エスピー著, 細谷亮太監訳: 私たちの先生は子どもたち! 子どもの悲嘆をサポートする本, 青海社, 10-12, 2005.
 28) 倉林しのぶ: 子どもをもつ寡婦へのグリーフケア セルフヘルスグループとしてのインターネットサイト掲示板活用, *臨床死生学*, 11(1): 68-75, 2006.
 29) E・A・グロルマン著, 日野原重明監訳: 愛する人を亡くした時, 春秋社, 20-22, 2003.

SUFFERINGS OF MIDDLE-AGED MEN WITH MINOR CHILDREN
 WHO HAVE LOST THEIR SPOUSES TO CANCER

Makiko Kondo*, Reiko Sato**

*Kagawa Prefectural College of Health Sciences, **Hyogo College of Medicine

KEY WORDS :

middle-aged husbands, bereavement, minor children, sufferings

The purpose of this study was to identify the sufferings of middle-aged men with minor children who have lost their spouses to cancer, and to determine the most suitable nursing care. We followed 5 men in their '30s and '40s with children <20 years and a spouse with cancer. We gathered data through participant observation and semi-structured interviews for 3 months before and 2 months after their spouse's death, and subsequently performed qualitative data analysis.

The sufferings of these men were as follows: 1) suffering the loss of an irreplaceable, precious loved one, 2) suffering the loss of their home, a symbol of the happiness the couple had built together, 3) suffering their wife's imminent death, 4) suffering the complexities of managing family life alone, 5) suffering the complexities of becoming a single parent, 6) suffering the feelings of isolation and helplessness, and 7) suffering the dependence on their wife after her death.

The results suggest these middle-aged men are confronted with the loss of their beloved spouses as well as the home they had built together, struggle with the pressures associated with single parenthood and try to protect the home that they created with their spouses. Key strategies used by nurses to support these men include: 1) assessment of the husband's life, 2) enhancing the quality of the husband's care of his wife, 3) preparing the family to lose the mother, and 4) incorporating the mother in the development of good, lasting parent-child relationships.